

VICTOR-MARIE HUGO



レ・ミゼラブル

Ⅲ

ユーゴー  
佐藤 朔 譯

新版世界文學全集

12

新潮社 版

# 新版世界文学全集12

レ・ミゼラブル Ⅲ

昭和三十四年十二月二十一日 印刷  
昭和三十四年十二月二十五日 発行

定価 参百五拾円

訳者

佐藤 朔

発行者

東京都新宿区矢来町七一  
佐藤 義夫

発行所

東京都新宿区矢来町七一  
株式会社 新潮社  
電話東京(34)七二一九番  
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 二光印刷株式会社  
製本 共同製本所

© Printed in Japan

## 目次

### 第四部 プリュメ通の牧歌とサン

#### ドニ通の叙事詩(つづき)

#### 第六篇 プチ・ガプロツシュ……………二

一 風の意地悪ないたずら……………二

二 プチ・ガプロツシュが大ナポレオンを

利用する……………三

三 脱走の大詰……………三

#### 第七篇 隠語……………四

一 起原……………四

二 語根……………五

三 泣く隠語と笑う隠語……………五

四 二つの義務——監視と希望……………六

#### 第八篇 喜びと悲しみ……………七

一 あふれる光……………七

二 完全な幸福の歎喜……………七

三 影のはじまり……………七

四 犬は英語でさまよい、隠語でほえる……………八

五 夜の物いろいろ……………八

六 マリユスは現実にかえってコゼットに

住所を知らせる……………八

七 年老いた心と若い心の対面……………九

#### 第九篇 かれらはどこへ行く?……………九

一 ジャン・バルジャン……………九

二 マリユス……………九

三 マブーフ氏……………一〇

#### 第十篇 一八三二年六月五日……………一〇

一 問題の表面……………一〇

二 問題の本質……………一〇

三 葬式——再生の機会……………一一

四 むかしの激情……………一二

五 パリの獨創性……………一二

第十一篇 原子が大風に協力する……………三〇

一 ガブロッシュの詩の起原に関するいくつかの説明 この詩にたいするあるアカデミー会員の影響……………三〇

二 行進中のガブロッシュ……………三六

三 理髪師のもっともな怒り……………三九

四 少年は老人に驚く……………四〇

五 老人……………四三

六 新入会者……………四四

第十二篇 コラント……………四六

一 創立以来のコラントの歴史……………四六

二 前 祝 い……………四八

三 グランテールに夜がおとずれかける……………四八

四 ユシユール後家をなぐさめるころみ……………五一

五 準備……………五一

六 待っているあいだ……………五一

七 ビエツト通で加わった男……………五一

八 ル・カビユックと名のる男についての……………五一

数々の疑問符。ル・カビユックは偽名らしい。……………五二

第十三篇 マリユス閣にはいる……………五三

一 プリュメ通からサン・ドニ街へ……………五三

二 ふくろうの見おろしたバリ……………五三

三 瀬戸 際……………五三

第十四篇 絶望の偉大さ……………五五

一 旗——第一幕……………五五

二 旗——第二幕……………五七

三 ガブロッシュは、アンジョルラスの騎銃をもらつておけばよかった……………五九

四 火 薬 樽……………六〇

五 ジャン・ブルーベールの詩の終り……………六〇

六 生の苦しみのあとの死の苦しみ……………六四

七 ガブロッシュは巧みに距離をはかる……………六六

第十五篇 オンム・アルメ通……………六八

一 おしゃべり吸取紙……………六八

二 灯火の敵である浮浪児……………二六  
三 コゼットとトゥーサンの眠っているあ  
いだに……………二〇

四 度をすごしたガブロッシユの熱狂……………三三

## 第五部 ジャン・バルジャン

第一篇 壁にかこまれた戦争……………三一

一 フォーブール・サン・タントワースの  
カリブデイスとフォーブール・デュ・

タンブルのスキュラ……………三二

二 深淵では話以外になにができようか？……………三七

三 光明と暗雲……………三〇

四 五人滅り、ひとりふえる……………三三

五 バリケードの高みからどんな地平線が  
見えるか……………三七

六 やつれたマリユス、無駄口きかぬジャ  
ベール……………三〇

七 情勢は悪化する……………三三

八 砲兵隊は真剣になる……………三五

九 むかしの密猟者の腕前と一七九六年の  
有罪宣告にひびいた百発百中の射撃を  
役立てる……………三七

十 夜明 け……………三九

十一 必中の射撃で、しかも人を殺さない……………四二

十二 秩序の味方の無秩序……………四三

十三 つかのまの微光……………四五

十四 アンジョルラスの恋人の名は……………四六

十五 とび出したガブロッシユ……………四八

十六 どのようにして兄が父となるか……………五一

十七 「死んだ父が死期せまる息子を待つ」……………五二

十八 禿鷹が餌食となる……………五九

十九 ジャン・バルジャンは復讐する……………六二

二十 死者は正しく、生者も誤っていない……………六四

二十一 英雄たち……………六七

二十二 一步 一步……………六九

二十三 なにも食べていないオレステースと、  
泥酔したピユラーデス……………七二

二十四 捕虜……………七五

## 第二篇 レビアタンのはらわた……………三二

- 一 海のためにやせる土地……………三二
- 二 下水の古い歴史……………三二
- 三 ブリュヌゾ……………三二
- 四 知られていない事実……………三二
- 五 いまの進歩……………三二
- 六 これからの進歩……………三二

## 第三篇 泥で、しかも魂……………三六

- 一 下水とその不意打……………三六
- 二 解 釈……………三六
- 三 尾行される男……………三六
- 四 かれも十字架を負う……………三六
- 五 砂にも女のような不実な悪だくみがある……………三六
- 六 陥 没 孔……………三六
- 七 上陸するつもりでいるところで坐礁することもある……………三六
- 八 破りとられた上着の裾……………三七
- 九 目ききの目にもマリユスは死人と見える……………三七

## 十 いのちを粗末にする息子の帰宅……………三九

## 十一 絶対者の動揺……………三九

## 十二 祖 父……………三九

## 第四篇 脱線したジャベール……………三九

## 第五篇 孫と祖父……………三九

## 一 亜鉛板をつけた木がふたたび登場すること……………四〇

## 二 マリユスは内戦から出て家庭で戦争にそなえる……………四〇

## 三 マリユス攻撃に出る……………四〇

## 四 ジルノルマン嬢もフオーシユルバン氏がなにかを小脇にかかえてはいつてきたのを悪く思わなくなる……………四〇

## 五 金は公証人よりも森にあずけよ……………四〇

## 六 ふたりの老人がそれぞれの仕方でもするツトが幸福になるようになんでもする……………四〇

## 七 幸福にまじる幻想の結果……………四〇

## 八 見つけたせないふたりの男……………四〇

第六篇 眠れない夜……………三〇

一 一八三三年二月十六日……………三〇  
二 ジャン・バルジャンは相変らず腕をつ  
つてゐる……………三七

三 ご執心……………三六

四 「不滅の心」……………三六

第七篇 苦盃の最後の一口……………三九

一 地獄の第七界と天国の第八天……………三九  
二 告白にふくまれる暗い影……………四〇

第八篇 たそがれの薄光……………四二

一 下の部屋……………四二

二 さらに数歩後退……………四二

三 ふたりはブリュメ通の庭を思い出す……………四三

四 引力と消滅……………四三

第九篇 最後の影、最後のあけぼの……………四六

一 不幸な人々へのあわれみ、そして幸福

な人々への寛容……………四六

二 油のついたランプの最後のおのき……………四六

三 フォーシュルバンの荷車をもちあげた

者が、いまはベンも重い……………四九

四 ものを白くすることしかできないイン

クつば……………四三

五 そのうしろに夜明けがある夜……………四七

六 草は隠し、雨は消す……………四六



レ・ミゼラブル

Ⅲ



## 第四部

ブリュメ通の牧歌と

サン・ドニ通の叙事詩（つづき）



## 第六篇 プチ・ガプロッシユ

### 一 風の意地悪ないたずら

一八二三年以後、モンフェルメイユの安料理店は左前となり、破産の深淵というほどではないが、小さな借金の水溜りに落ちこんでいった。ところでテナルディエ夫妻には、別の子供がふたりいた。どちらも男だった。それで五人になり、女の子がふたり、男の子が三人で、多すぎた。

テナルディエのおかみは、ふしぎな幸運にめぐまれ、ふたりの末っ子を、まだ幼いころ、ごく小さいうちに、かたづけしてしまった。

かたづけるということばは、まことに適切だった。この女は性質がかたよっていた。これはよくあることだ。ラ・モット・ウーダンクール元帥夫人と同じく、テナルディエのおかみは、女の子にたいしてだけ母親だった。彼女の母性はそこでとまった。人類にたいする憎悪は、自分の息子からはじまった。息子にたいする意地悪さきたら大変なもので、彼女の心はそこに不吉な崖をかたちづけていた。すでにご存じのとおり、彼女は長男を憎んでいたが、他のふたりの男の子も嫌っていた。なぜ

か？ なぜなら、そこには最もおそろしい動機、最もはつきりした答えがあった。つまり、「うるさい子供なんかいらぬ」と彼女は言っていたのである。

テナルディエ夫妻が、いかにしてふたりの末っ子をかたづけ、それによって利益さええたか、ということを書明しよう。

なんべージか前に問題になったマニョンという女は、自分のふたりの子供を餌にして、ジルノルマン爺さんから年金をもらっていたあの女のことである。彼女はセレストアン河岸の古いプチ・ミユスク通の角に住んでいたの、自分の悪い評判がかえって人気になっていた。人々はおぼえているだろうが、三十五年前に、グループ性喉頭炎が流行し、パリのセーヌ河ぞいの地区を悩ましたことがある。医学がそれを利用して、明礬吸入法の効果を大規模に実験した。そしてこんにちでは、きわめて有効なヨードチンキがそれに代って外用されることになった。この大流行のときに、マニョンは、同じ日の朝と夕方に、まだ幼いふたりの男の子をなくした。これは打撃だった。これらの子供は母親にとって大事な子で、毎月八十フランになっていたいたのである。その八十フランは、ジルノルマン氏の名前で、ロワ・ド・シル通の退職執達吏でバルジュ氏という年金受取人から、いつもきちんとして払われていた。子供が死ぬと、年金もなくなったわけだ。マニョンは一策を思いついた。彼女が属している悪の暗い秘密結社では、すべてを知りながら、秘密をまも

り、おたがいに助けあった。マニオンにはふたりの子供が必要だったが、テナルディエのおかみにはふたりの子供がいた。同じように男の子で、年齢も同じだった。一方にとっては、よい整理だし、他方にとってはよい投資だった。テナルディエの息子たちがマニオンの息子になった。マニオンはセレスタン河岸を去つて、クロシユベルス通に移った。パリでは、住所が一から他へ変ると、その人物が何者だかわからなくなる。

戸籍にのつていなかったたので、文句なしに、取替はごく簡単におこなわれた。ただ、テナルディエの亭主が、子貸し料に、月に十フラン要求したが、マニオンはそれを承知し、支払いさえした。シルノルマン氏が約束をまもりつづけたことは言うまでもない。かれは六カ月ごとに子供に会いにきたが、子供が変っているのに気づかなかつた。「だんなさま」とマニオンがかれに言った、「ふたりとも、だんなさまによく似ていますよ！」

転身がうまいテナルディエは、この機会を利用して、ジョンドレットになった。かれのふたりの娘とガブロッシュは、自分たちにふたりの弟がいたことにほとんど気づくひまがなかった。貧困がある段階に達すると、一種幽霊じみた無関心にとらえられ、他の人々まで怨霊のように見えるものだ。しばしば、最も身内の者でもほんやりした影のようになり、人生の曇った奥底にその姿がかすかに見えたかと思うと、すぐにまぎれて、見えなくなってしまう。

永久にあきらめる決心をしたものの、いざマニオンにふたりの子供を渡してしまつた日の夕方、テナルディエのおかみはすこし心配になった、いや心配になったようなふりをした。彼女は亭主に言つた、「でもこれでは子供を棄てるみたいだよ！」横柄で冷淡なテナルディエはその心配をこう言つてふきとばした。「ジャン・ジャック・ルソーはもつとうまくやつたぜ！」母親の心配は不安に變つた。「でも、警察がうるさくないものかね？こんなことをしても、ねえお前さん、いいものかね？」テナルディエは答えた、「なにをしたつていいやね。だれもあやしむものはいねえよ。一文なしの子供たちのことだ、だれも目をつけようなんて、するものか」

マニオンは罪深いくせに、ハイカラなところがあつた。化粧もしていた。わざとらしい貧弱な家具をそなへつけた家に、フランスふうになりきつた、物知りのイギリスの女泥棒といつしよに住んでいた。このパリに帰化したイギリス女は大金持とつきあい、図書館の古代貨幣や、マルス嬢のダイヤモンドとも親しく交際していて、のちに法廷の帳簿にもつて、有名になった。「ミス嬢」と呼ばれていた。

マニオンの手に落ちたふたりの子供は、不平を言う必要がなかった。八十フランになるので、利用されるすべてのものと同様、大事にされていた。身なりも悪くなく、食べ物も悪くなかつた。「若さま」のような待遇で、実母のところにいるよりも、養母のところにいるほうが

よかった。マニョンも貴婦人らしくふるまい、子供たちの前では隠語など使わなかった。

こんなふうで数年たった。テナルディエの亭主はこれからもうまういくと思っていた。ある日、その月の十フランをもつてきたマニョンに言った、「もうへ親父へ教育してやらなくちやいけねえ」

突然ふたりのあわれな子供は、それまで悪い運命とはいえ、とにかく保護されていたのだが、急に世間に投げだされ、自分で人生をはじめねばならなくなった。

ジョンドレットのあばら屋で起こったような悪人の一斉検査には、必ずあとで、搜索や投獄がからんでくるもので、一般社会の影で生きている秘密の、憎むべき反社会にとつて、一つの災難である。この種の事件は、あの暗い世界に、あらゆる種類の崩壊をひき起こす。テナルディエの破滅は、マニョンの破滅になった。

ある日、マニョンがプリュメ通に関する手紙をエポニーヌにとどけてからまもなく、突然、クロシユベルス通に警察の手入れがあった。ミス嬢と同じく、マニョンもつかまり、あやしまれていたその家じゅうの者が、一せいに逮捕された。このとき、ふたりの男の子は裏庭で遊んでいて、警察の手入れに気づかなかった。家にはいろいろとしたとき、戸がしまっていて、家は空になっていた。前の店の靴直しが、かれらの「母親」が残していった紙きれをかれらに渡した。この紙きれには宛名が書いてあった。ロワ・ド・シシル通八番地、年金受取人バルジュ

さま。店の人はかれらに言った、「お前たちはここにいられまい。あそこへ行きな。すぐ近くだ。すぐ左にまがったところだ。この紙をもつて道をきいて行けばいい」ふたりの子供は出かけた。道案内になるべき紙きれを手にとって、兄が弟の手を引いていった。寒かったので、小さな指がかじかんで、紙きれをしっかりとぎっていられなかった。クロシユベルス通の角で、風に紙きれがふきとんでしまった。夜になっていたので、子供は見つけることができなかった。

かれらは往來をあてもなくさまよいはじめた。

## 二 ブチ・ガブロッシュが大ナ

ポレオンを利用する

パリの春は、かなりしばしばするどきびしい北風におそわれ、人々はすっかり冷えきるばかりでなく、凍ってしまふほどだった。この北風は晴れわたった日まで憂鬱にするもので、まさに、窓のすきまやよくしまらない戸口から、暖かい部屋にはいつてくる冷たい風みたいである。冬の陰鬱なとびらが半ばひらいて、そこから風がはいってくるようだった。一八三二年の春は、十九世紀のヨーロッパで最初の大流行病が発生した時期だが、この北風が例年よりもきびしく身にしみた。冬のとびらよりもずっと冷たいとびらが半ばひらいたのである。それ

は墓穴の扉だった。それらの北風には、コレラのいぶきを感じられた。

気象学上の見地からすると、寒風は強い電圧をこぼまないという特質がある。稲妻と雷鳴をともしなう驟雨が、そのころよく降った。

ある晩、その北風がはげしく吹いて、また一月がもどったように思われ、市民がまたマントを着ていたとき、プチ・ガブロッシュはいいかわらずほろをまとつてふるえながら、それでも陽気で、オルム・サン・ジェルベール付近の床屋の店の前に立って、うつとりとしているみたいだった。どこかでひろった女物の羊毛のショールをかけ、それをマフラーのかわりにしていた。プチ・ガブロッシュは、二つのランプのあいだで、通行人に笑顔を見せながらガラスの向うで回っている、オレンジの花を頭にかざって、首筋をあらわにした蠟でできた花嫁人形にすっかり見とれているようだった。だがじつは、ショーウィンドウの石鯨を一つ「ちよろまかす」ことはできないものかと観察しているのだ、うまくいったら、町はずれの「床屋」に一スーで売りに行くつもりだった。かれはしばしばそういう一片で朝飯にありつくことがあった。かれはこの種の仕事がうまく、そのことを「床屋のひげをそる」と言っていた。

花嫁人形をながめたり、一片の石鯨を横目で見ながら、かれは口のなかで、こうつぶやいた。

「火曜日。火曜じゃない。火曜かな？ 火曜かもしれない

い。そうだ火曜だ」

このひとりごとがどんな意味なのかすこしもわからなかった。もしかすると三日前の、この前食べた夕食に関係があったかもしれない。なぜなら、この日は金曜日だったから。

床屋はよく燃えたストーブで暖められた店のなかで、お客の顔をそりながら、ときどきその敵のほうを横目でにらんでいた。そのこごえた横柄な浮浪児は、両手をポケットに入れて、心のなかでは明らかに鞘をはらつて一仕事しようとかくらんでいるようだった。

ガブロッシュが花嫁人形や窓ガラスやウィンザー石鯨を見つめているあいだに、背丈のちがう、かなりきれいな着物を着た、かれよりも小さいふたりの子供、ひとり七歳で、もうひとり五歳くらいにみえる子供が、ドアの把手をおすおすと回して、店にはいり、なにかのうでいたが、たぶん施し物をくれとでもいうのだろう、懇願というよりも泣き声に似たあわれな声でつぶやいていた。ふたりでいっしょに口をきいたが、年下のほうはすすり泣きで声がとぎれ、年上のほうは寒さで歯がたがたしているのだ、声が聞こえず、ことばは聞きとれなかった。床屋はおこった顔でふりむくと、かみそりもおかずに、年上のほうを左手で押し返し、年下のほうを膝で押しながら、ふたりとも往来に追いだして、こう言いながらドアをしめた。

「つまらぬことでお客さんたちを寒むがらせにきやがっ